



むれやま荘だより
みち

岐路

～踏み出す一歩～

Mureyama News



■発行者

障害者支援施設
滋賀県立むれやま荘

滋賀県草津市笠山八丁目 5-130
TEL: 077-565-0294
FAX: 077-565-0295



「働いてみたい」「働きつづけたい」 職場であるために

所長 北川 弘



今回のむれやま荘だよりでは、子育て世代の職員の皆さんによる「仕事と育児の両立」に関する報告をテーマに特集を組むこととなりました。福祉職場は、急激な人口減少の影響等により、労働力の確保がますます困難な状況に陥っています。むれやま荘においても、婚姻に伴い遠方へ転居することによる離職などがあり、その後の人員補充には大変苦慮しているのが現状です。

こうした中、単に労働力を確保するだけでなく、「働き続けることができる職場」であるために現在取り組んでいることについてご紹介したいと思います。

国においては、育児・介護休業法の改正により、子の看護・介護休暇の取得要件の緩和、育児のための所定外労働の制限(残業免除)の対象拡大、育児・介護のためのテレワーク導入の努力義務化、介護離職防止に向けた雇用環境整備や個別周知・意向確認の措置、さらに仕事と育児の両立に関する個別の意向聴取や配慮などが定められました。また、令和4年10月には産後パパ育休制度が施行され、むれやま荘では施行後に対象となった3名の職員全員が取得することができました。

私たちの法人では、出産や育児、介護に関する手厚い休暇・休業制度を整備し、働きやすい職場環境づくりに努めています。例えば、出産前後の母体保護の観点から、労働基準法に定める6週間の産前休暇に加え、法人独自の2週間の特別休暇を設け、計8週間の産前休暇取得を保障しています。また、育児・介護休業法に定める子の看護等休暇(学校行事等も含む)については、法定の年5日を6日に拡充するとともに、取得対象となる子の範囲を小学校3年生までを6年生まで拡大するなど、法人全体で働きやすい職場づくりを前向きに進めています。

むれやま荘では、職員が安心して働き続けられるよう、出産・育児・介護に関する休暇を取得しやすい環境整備に努めるとともに、生成AIを活用した業務の省力化にも取り組み始めています。

さらに、「働きたい職場」となることを目指し、県内で唯一の社会リハビリテーション提供施設という特徴を活かした、医療では実施が難しい特色あるリハビリテーション

サービスの充実にも取り組んでいます。現在は、社会生活力を高めるためのプログラムや、エンパワメント向上を目的としたグループワーク、失語症の方を対象とした対話型の美術鑑賞プログラムなどを展開し、働く側にとっても魅力ある職場であり続けられるよう、特色ある運営を進めています。今後は、生成AIや情報通信機器(ICT)を活用したリハビリプログラムの開発・導入を進め、利用される方だけでなく、働く職員にとってもやりがいと魅力を実感できる職場づくりに努めてまいります。

また、さらに「働いてみたい」「働き続けたい」と思える職場環境を実現するため、幅広い職種が在籍しているという強みを活かし、専門職による心理的安全性の向上を目指したサポート体制を整えるとともに、業務面での支援を担う育成担当者を配置し、安心して長く働き続けられる職場づくりを推進していきます。

前段でも触れましたが、福祉の仕事を生涯の職業として選択する方は年々少なくなっています。そのため、どの法人も新たな人材の確保に加え、現在働いている職員に長く勤め続けていただくため、さまざまな工夫と努力を重ねています。一方で、いわゆるオールドメディアでは、福祉の職場がいまだに「3K(きつい・汚い・危険)」の仕事として取り上げられ、そこで働く職員の大変さだけを切り取った報道がなされることもあります。私は福祉の現場で長年働いてきましたが、仕事のごく一部だけを取り上げたこうしたネガティブなイメージが広がることを大変残念に感じています。

福祉の仕事には、社会の中で果たすべき非常に広範な役割と大きな可能性があります。一般に抱かれているイメージとは異なる、多様な働き方や専門性の発揮の場が数多く存在しています。むれやま荘では、福祉の専門職であるケースワーカーやケアワーカーが、施設内に配置されたりハビリ専門職、看護職、栄養職などの多職種と連携しながら、医療機関で行われるリハビリテーションとは異なる視点で、エンパワメントを高めるグループワークや社会生活力向上プログラムを実践しています。利用者の皆さんとともに楽しみながら取り組むこれらの実践は、福祉の仕事の魅力と可能性を体現するものと考えています。

文化祭「岐路フォーラム」開催

— 岐路が交わる場所、むれやま荘の物語 —



第42回文化祭では、初の試みとして「岐路フォーラム～むれやま荘での生活をより豊かにするために～」を開催しました。40年以上続く利用者小冊子「岐路(みち)」の投稿者をゲストに迎え、日々の生活で感じていることや工夫、そして施設への思いを語っていただきました。岐路には、体験や将来の目標を綴った文章だけでなく、失語症の方が好きな言葉をデザインとして表現するなど、多様な“自分らしさ”が息づいています。長く

受け継がれてきたこの文化が、今回のフォーラムの原点となりました。

当日は、自治会長として活躍したAさん、行事参加や組紐指導を通して「できること」を広げてきたBさん、そしてギランバレー症候群と向き合いながら前向きに暮らすCさんの3名が登壇しました。

Aさんは自治会活動を通じて人前で話す力を身につけ、仲間の意見をまとめる役割にも挑戦してきました。退所後の就労を見据え、日々の訓練にも真剣に取り組む姿が印象的でした。Bさんは麻痺と向き合いながらも、地域イベントや組紐指導を通して「自分にもできることがある」と実感を重ねてきました。誰かの役に立てる喜びを語る表情には、周囲とのつながりを大切にしている温かさがにじんでいました。Cさんは重い症状を経験しながらも、自然の中で心を整え、再び福祉の現場に戻るといふ夢を語っていただきました。困難を乗り越えてきたからこそ生まれる言葉には、静かな強さが宿っていました。

三人それぞれの歩みは異なりますが、共通している

のは「自分らしく生きることをあきらめない姿勢」と「周囲とのつながりを大切にしている心」です。

リハールでは、利用者職員が何度も対話を重ね、それぞれが自分の歩みを振り返りながら言葉を紡ぐ大切な時間となりました。その中では、これまでの経験を振り返る中で、思いが自然とこみ上げる場面もありました。長く胸の内にあつた気持ちに触れたことで、言葉にならない感情が静かに表れたのだと思います。その時間を、周囲の方々もそっと受け止め、穏やかな空気が流れていました。こうしたやり取りは、互いの人生に耳を傾け合うフォーラムならではの大切な瞬間でもあります。

本番でも、見えにくい困りごとへの気づきや支援のあり方を考えるきっかけが会場全体に広がりました。

むれやま荘では、利用者一人ひとりの声を大切に、安心して暮らせる環境づくりを進めています。今回のフォーラムは、その取り組みを共有し、互いを理解し合う貴重な機会となりました。これからも、利用者の思いに寄り添った支援を続けていきます。



仲間の赤ちゃんはみんなの宝



ちびっ子3人大集合!
黒木家、山口家、山邊家が集まり、
ホームパーティをした時の一コマです!

向き合うとき

山邊 弘樹
法人企画局 地域共生部 山邊 まみ

2020年春、娘が生まれました。コロナ禍であり立ち合いや面会ができず、初めて娘を抱ったのは退院の時でした。

当時の私は、今と別の部署におり、利用者の地域移行を担当していました。地域移行支援は入職前からやりたかった仕事であったことと「1人目やし大丈夫やろ」という育児への軽い気持ちから育休は取得しませんでした。利用者向き合えたことに後悔はありませんが、「子育ての大変さを理解しておらず妻に迷惑をかけたな」と今になって思います。

その後むれやま荘へ異動となり、妻の仕事復帰と共に娘が保育園へ。保育園送迎の関係から、時短勤務を取得することになりました。はじめは、仕事時間が短くなることに抵抗を感じていました。しかし、実際の生活が始まると、そんなことを考えている暇はありません。朝食準備⇒朝食⇒身支度⇒送迎⇒出勤を毎日こなす、怒涛の日々が過ぎていきます。私の思いはいつしか「時短勤務をとらないと生活できない」という考えに代わりました。結果として計2年間ほど時短勤務を続けたことで、送迎や朝のバタバタが「楽しくかけがえのない時間」へと昇華されました。

2025年夏、息子が生まれました。無事立ち合いを許可され、入院中は娘と2人毎日面会に行きました。妻のつわり期間や入院中は、娘と2人暮らしだったのですが、寝る前に「ママに合いたい」とシクシク泣いている娘を見て、自分の至らなさや妻の偉大さを思い知らされました。息子が家に帰ってきてからは、初めて約1ヶ月間の育休を取り、新生児を愛でながら、

3歳の娘と遊ぶ日々を過ごしました。妻が産後、家事をこなすことが難しい時期にフリーで働ける大人が1人いる効果は絶大で、追いついていなかった家事を終わらせ、自宅の大掃除ができるほどでした。(ありがたいことです笑)

これまでの変遷について紹介しましたが、むれやま荘で育休を取得できた要因はいくつかあります。

1つ目に、『育休を歓迎してくれる環境であったこと』。前述した通り、私は元々「育休を取得したい」と思うタイプではありませんでした。むしろ、休んだり、働く時間を短くしたりすることに後ろめたさを持っていたわけですが、上司や同僚からの好意的な反応と、取得への前向きな意見により、一歩を踏み出すことができました。最初は時短勤務の取得でしたが、1度取得できたことで心理的なハードルが下がり、長期間の育休を取得しようと考えることにつながりました。そして何よりも、勤務調整や仕事の引継ぎに応じてくれた人、子供の送迎をしていることに対して「大変やな」と声をかけてくださる人、新しく子供ができたことを「おめでとう」と祝福してくれる人などなど、温かい皆さんのご協力のおかげであると感じています。

2つ目に、『むれやま荘が日勤を中心としたシフト制であること』。むれやま荘のシフトには宿直/夜勤/遅出/早出などのシフトもありますが、人員が必要な時間帯が平日の9:30～15:30に集中しており、時短勤務を取得しやすい環境にあるといえます。また、育休からの復帰を考えても、シフトに比較的日勤が多いことで、生活の見通しを立てやすくなると感じました。

育休を取得してみて、時短勤務という限られた時間で仕事をする中で、業務効率化を意識できました。そして、育休で自分がいなくても仕事が循環するように業務の抱え込み防止を目指すようになりました。ワークライフバランスを考えながら働くことは、結果的にワーク面にも

プラスの影響を与えることができると実感しました。育休を取得させてでも働き続けてほしいと思ってもらえるよう今後も精進していきたいと考えます。

最後に、これから労働人口が減少する中で、育児や介護、その他様々な理由で働き方を考えなければならない人が出てくると思います。自身が必要な時に休暇を組み合わせることで、周りの方が必要となったときに自分が支える側に回ることができるのではないかと考えています。これから周りで育休を考えておられる方がいれば、力になれるよう心掛けます。

私は、現在妻と共にW育休中です。分割での育休取得を認めていただき、2度目の育休となります。おかげで、色々な表情を見せてくれる息子とおしゃべりが大好きな娘のさらなる成長を見守ることができています。ありがとうございました。



滋賀県立美術館

対話鑑賞はじまりました!



10月より滋賀県立美術館にて対話鑑賞が始まりました。対話鑑賞とは作品から気づいたこと、気になったことを言葉にして楽しむ鑑賞プログラムのことです。今回は失語症の方を対象とし、4名参加がされました。対話鑑賞と失語症という組み合わせに少し不安を感じながらのスタートでした。

美術館の学芸員さんなどのようにすすめたらよいのか話し合い情報を共有し、鑑賞後には振り返りを行うなど試行錯誤しながら実施しています。

今までに10月、12月、1月の3回開催しました。

1回目はお互いに緊張しながら始まりましたが、絵画を鑑賞すると何かしら思うことがある様子で一生懸命に絵を指さしながら言葉にしようとしていました。しかし、なかなかうまく表現できず、もどかしさを感じつつも、絵を介すことで指さしがヒントとなり何となくお互いに通じ合うことができていたように感じます。言いたいことが伝わった時のホットとした嬉しそうな表情が印象に残っています。

2回目、3回目になると何をすることが分かり、またお互いに慣れてきたこともあって、自ら発言しようと

する様子も見られてきました。思うことを身振り手振り、言葉にして何とか伝えたいという想いが強くなり絵に近づきすぎてしまう場面もありました。最初に「一言ずつ何か伝えないといけない」とじっくりと絵を見る真剣な表情も出てきました。徐々に絵に対しての興味も深くなってきているようです。むれやま荘ではあまり見られないような表情や行動がみられる貴重な機会ではないかと思えます。

最初は失語症と対話鑑賞が結びつくのが不安でしたが、実際に行ってみると言葉を出すきっかけ、コミュニケーションのきっかけになっているように感じます。言葉で伝えるだけでなく身振りや指さしという代償手段も自然と出ているように思います。学芸員さんの話をしっかりと聞き理解しようとすることや質問の内容に興味を持つことで理解に関しても少しずつ変化がみられる事を

子どもも私も成長中

山口 礼奈

7月に出産し、現在育休を取得中です。産休、育休を経験した私から言えることは「こんなに取りやすくていいの？ありがたい！」です。妊娠がわかり、所長に伝えた時も第一声が「おめでとう！」と笑顔で言ってくださり、体調はどうか、どのタイミングで全体に周知するかなど親身になって相談に乗っていただきました。職員の皆さんに報告した際も、誰一人嫌な顔せず祝福して下さったことを覚えています。妊娠中から仕事内容の配慮や、業務のフォローなどたくさんしていただきました。検診に係る休暇があったり、産前休業前休暇という制度もあり、とても助かりました。振り返ると所長をはじめ、職員の皆さんの温かい支えがあってこそこのマタニティライフだったと思います。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。予定日より2週間早い出産から、気づけば半年が経ちました。0歳の母。日々奮闘しています。子供が笑うだけで、寝返りをするだけで、離乳食を食べてくれるだけでこんなにも嬉しいものかと。悩みもありますがそれも含め全てが尊い。まさにエモいです。毎日色んな

表情、行動を見せてくれる、この子の成長をずっとずっと近くで見たいのが正直な気持ちですが、職場復帰したい気持ちがあるのも本音です。そう思えるのは、むれやま荘だからこそです。温かくユーモア溢れる職員の皆さん、他では味わえない生活支援、業務内容、私にとっての楽しい！がたくさん詰まっている職場がむれやま荘です。復帰時期は未定ですが、復帰後の時短勤務も「時間の調整もできるから相談してね」と言っていたら、こんなに素敵なお所があるのか？と思うくらい戻りやすい、戻りたい職場です。

これからも支えてくれる人たちに感謝しながら、家族との時間も仕事も楽しめるこの環境で、私らしく頑張っていきたいと思います。



育児と仕事の両立

～毎日が新たな発見～

黒木 大佑
法人事務局 総務部
黒木 麻里

1月のある日、妻から「赤ちゃんができた」と聞きました。嬉しさがこみ上げてきたことは覚えています。その時はまだ実感が湧いていませんでした。今振り返ると、もう少し素直に喜びを表現してもよかったのかもしれない(笑)。最初にしたことが『初めてのたまごクラブ』の購入でした。

そして4月。仕事では新たな職場でのスタート、プライベートでもこれまでとは大きく異なる生活が始まりました。妻はこれまで通り仕事に通っており、私は新しい環境に慣れることに

精一杯で、まだ“育児”の実感がないまま、妻は産前休業に入りました。幸い、妻の体調は安定しており、大きなトラブルもなく出産の日を迎えることができました。むれやま荘の皆さんからは「育児休業はいつから取るの?」「赤ちゃん楽しみやね」「お父さんになるんやね」と、温かい言葉をたくさんかけていただきました。4月に配属されたばかりの私にとって、こうした声掛けは大きな支えとなりました。

出産予定日の約1か月前からは、夜勤や週末のシフト調整をしていただき、そのおかげで9月には無事に出産を迎え、立ち会いにも参加することができました。

私は10月末から11月中旬まで、パパ育児休業を取得させていただきました。担当ケースを代わりに対応していただける体制が整っていたことで、安心して休業に入ることができました。育児休業中は、家族3人でゆったりとした時間を過ごし、日々成長していく子どもと向き合う貴重な経験となりました。

現在、子どもは生後4か月を過ぎ、首も座るようになりました。一つひとつの行動が新たな発見で、「今日は声を出して笑ってくれた」「お父さんと分かってくれたのかな」「寝返りももう少しかな」と、毎日家に帰ることが楽しみになっています。育児休業は、自分一人の力で取得できるものではなく、周囲の皆さんの理解と支えがあってこそ成り立つ制度だと実感しています。一方で、実際に取得してみて、育児に向き合う時間を持つことが、家族だけでなく自分自身の働き方を見つめ直す良い機会になるとも感じました。今後も、子どもの成長を身近で見守るため、育児休業の取得を前向きに考えていきたいと思っています。これからも、働きがいのあるむれやま荘で、仕事と家庭の両立を大切にしながら、日々の業務に取り組んでいきたいと思っています。これから育児休業の取得を考えている方には、周囲に相談しながら、ぜひ一歩踏み出してほしいと思います。



期待しています。むれやま荘だけではなかなか行うことができない活動であり今後も学芸員さんと協力し良い効果を期待し模索し、楽しみながらすすめていけたらと思っています。



むれやま荘の食堂から

毎日を美味しく! 楽しく!

むれやま荘の給食施設では、毎日3食の食事を提供しています。厨房には2名の調理師と5名の調理補助がおり、日々心を込めておいしい給食づくりに努めています。なかでも、季節ごとの行事食を利用者の皆さまに楽しんでいただくことを大切にしています。また、選択メニューや郷土料理を献立に取り入れるなど、食事の時間がより豊かで楽しいひとときになるよう心掛けています。

利用者さんから「ハンバーガーが食べたい。」とのリクエストをいただき、メニューに取り入れてみました。ハンバーガーは食べにくいと感じられたり、カロリーを気にされる方もいらっしゃるため希望される方に選んでいただけるよう選択メニューにしました。また、郷土料理や世界の料理も取り入れ、施設にいながらさまざまな味を楽しんでいただけるよう工夫しています。いろいろな料理に触れることで、「食」への関心が広がり、日々の食生活を考えるきっかけになればうれしく思います。

元旦は、朝食と昼食におせち料理をお出ししました。朝食には干支の折り紙を添え、いつもとは少し違う食器に盛り付けることで、雰囲気を変えてみました。利用者さんにも、新しい年を迎えた気持ちを感じながら、楽しく召し上がっていただけたのではないかと思います。昼食は松花堂弁当風のおせち料理にしお正月らしい華やかな気分を味わっていただきました。



お正月メニュー



ハンバーガー

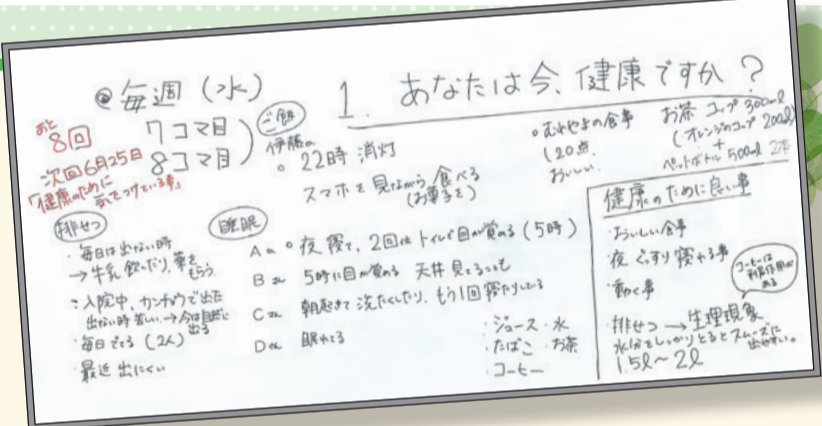
ハンバーグ

ランチボックス

むれやま荘の 社会生活力プログラム

皆さん真剣に取り組んでいます!!

所長代理 飯田 尚樹



むれやま荘では、昨年度から力を入れて取り組んでいる「社会生活力プログラム (Social Functioning Ability)」というものがあります。「社会生活力プログラム」は、障害のある方が主体的に自立した日常生活や社会参加を実現するため、生活に必要なスキル(金銭管理、体調管理、コミュニケーション、障害の理解など全24モジュール)をグループワークやロールプレイを通じて身につける「社会リハビリテーション」プログラムになります。

むれやま荘を利用される方はほとんどが中途障害者です。ある日突然倒れたり病気が発症したり。その日を境に、命が助かった後の生活がこれまでとは一変してしまう経験をしてむれやま荘へやって来られます。そして、それまでの生活スタイルも人の数だけ様々です。例えば「食生活」を切り取ってみても、調理をほとんどしたことのない方、一年365日3食カップラーメンだった方などもおり吃驚することもありました。「健康」についての知識がそもそも不足していたり関心がなかった方も多い様です。「健康管理」「セルフケア」「生活リズム」などは、どなたにも共通する課題であると感じる様になりました。グループワークでは職員はファシリテーター役で、皆さんからの発言を引き出すことを大事にします。皆さん自分の苦手な部分はあまり知られたくないかもしれませんが、誰かが話し始めると意外と話が盛り上がり、その中で「気づき」が生まれると尚更のようです。

また、むれやま荘を利用するほとんどの方には「高次脳機能障害」があります。特徴的ですが「正しく病識を持ってない」ことが次の生活や就労への移行を妨げることもあります。むれやま荘の利用を開始されて、「社会生活力プログラム」のグループワークなどを経験し、周りの仲間たちの様子を知ったり意見を交換する中で、自身の状態を正しく捉え直すことができればと思います。

ある利用者が言いました。「また〇-〇〇〇〇行きたいわ」。これからこんな風に暮らしたい、こんなことをしたいという目標を見つけ、主体的で充実した自分らしい生活を築ける力を養ってもらえる様に、これからも多職種が連携して取り組んでいきたいと思っています。



編集後記

今回の特集「職員の育休」についてご興味のある方も多くいらっしゃるのではないのでしょうか。男性だけでなく女性もしっかり働く今の時代に、ママだけでなくパパも

育休がとれ復帰しやすい職場は、あるようで実際はなかなか難しかったり、とりづらいのが現実だと思います。むれやま荘では、職員の仕事環境やプライベートを尊重しながら職員同士助け合い日々仕事に取り組んでいます。職員の環境が整っていることで仕事への取り組みにも良い形で現れ、利用者の方へより良いサポートが

できる職場であると思います。この環境に感謝し、むれやま荘がより良い施設になるよう今後も業務に取り組んでいきたいと思っています。むれやま荘だより「岐路」をお読みいただきありがとうございました。

